



研究ノート

# ヴェイル・長衣・帳とばり…現代イランの 公的空間と女性

桜井 啓子 早稲田大学国際学術院教授 イスラーム地域研究機構長

## 一・ヴェイル・長衣・帳とばり

コーラン①は忠告する。

男の信者たちに言つてやるがいい。「自分の係累以外の婦人に対しては）  
かれらの視線を低くし、貞潔を守れ。」②（二四章三〇節）  
信者の女たちに言つてやるがいい。かの女らの視線を低くし、貞淑を守  
れ。③（二四章三一節）

なぜ男女は互いを視てはならないのだろうか。それは、男性が、女性の魅  
力に極めて未防備で、ややもすると理性を失い、あつてはならない関係に走  
る可能性があるからだ。そうなれば家族の名誉は傷つき、家庭も崩壊する。  
コーランはさらに忠告する。

外に表われるものの外は、かの女らの美（や飾り）を目立たせてはならな  
い。それからヴェイル④をその胸の上に垂れなさい。（二四章三一節）  
「預言者よ、あなたの妻、娘たちまた信者の女たちにも、かの女らに長衣を  
纏うよう告げなさい。」⑤それで認められ易く、悩まされなくて済むであら  
う。（二三章五九節）。

しかし、女性のヴェイルや長衣は、すべての男性に対して必要なわけでは  
ない。コーランが例外とみなすのは、以下のような男性たちである。

自分の夫または父の外は、かの女の美（や飾り）を表わしてはならない。  
なお夫の父、自分の息子、夫の息子、また自分の兄弟、兄弟の息子、姉妹  
の息子または自分の女たち、自分の右手に持つ奴隷、また性欲を持たない  
供回りの男、または女の体に意識をもたない幼児（の外は）。（二四章三一節）

コーランは、ヴェイルや長衣のほかに、女性と親族外の男性とを遮るもう  
一つの方法、帳とばりにも言及している。コーランは、男性信者に対して次のよう  
に忠告する。

信仰する者よ、預言者の家に食事に呼ばれても食事の準備が、完了するま  
では、家の中に勝手に入つてはならない。だが呼ばれた時は入りなさい。  
…またあなたがたが、かの女らに何ごとでも尋ねる時は、必ず帳とばりの後か  
らにしないさい。その方があなたがたの心、またかの女らの心にとって一番  
汚れない。（二三章五三節）

このようにコーランは、男性信者の「貞潔」、女性信者の「貞淑」を守る  
ために、男女の間に適切な距離を置くための装置として、「ヴェイル」や  
「長衣」、さらには「帳」を紹介している。換言すれば、「貞潔」「貞淑」を守  
ることが目的であり、「ヴェイル」、「長衣」、「帳」は、そのための方法とな  
る。しかし、信者がコーランに示された方法を実践に移そうとすると、実際  
には、さまざまな問題に直面する。なぜならば、コーランが言う「かの女ら  
の美（や飾り）」が、具体的に何をさすのかは、必ずしも明確ではないから  
だ。また、それらをどのように隠すべきかについてのコーランの記述は具体

性に欠けている。さらに、実践するにあたっては、誰がルールを決めるのか、どこまでを強制するのかといった点も問題となる。

実践に必要な具体的な指針の不足は、「ヴェイル」「長衣」や「帳」に関する多様な解釈と、時代、生活様式、気候風土に応じた実践における多様性を生み出してきた。つまり時代や地域を横断するような「ヴェイル」「長衣」や「帳」に関する一般論は存在しないことになる。そうした点に留意しつつ、ここでは、イスラーム政権のもとで「イスラーム的な社会」造りを目指してきた現代イランの事例を取り上げ、「ヴェイル」「長衣」や「帳」といった装置が、現代のイラン社会の中でどのように使われ、また、それらがどのように人々、特に女性たちの暮らしに影響を与えてきたのかについて考察してみたい。

## 二．服装規定

イランでは一九七九年のイスラーム革命以後、イスラーム化の名のもとに、服装規定が導入され、様々な分野で男女分離が進められてきた。服装に関しては、女性は、外国人や異教徒も含め皆、公共の場では、頭髮を隠すスカーフ（ルーサリー）と体の線を隠すコート（ループーシユあるいはマーント）を着用しなければならなくなった。さらにその上からチャードルと呼ばれる一枚の布を被ればより完璧とされている<sup>7)</sup>。近頃は、日本でも、ムスリム女性のかぶりものとして様々な形のヒジャーブ<sup>8)</sup>が紹介されるが多くなっているが、イランで理想とされているのは、写真1のようなスタイルである。イランでは、義務化されていることから、着用するか否かではなく、どのように着用するかが問題となる。

イラン国内では、革命から三〇年以上を経た現在でも、服装規定に対する女性たちの評価は分かれている。服装規定に否定的な女性たちは、女性が自分の特徴を隠さなければならぬことに屈辱を感じているだけでなく、男性の問題行動を未然に防ぐために女性に負担を求めるという発想に憤る。男性の側の意識や認識を変えたいという発想がないことが問題なのだ。また古くからイランの男性たちは、身内の女性の「貞淑」を守ることは男性親族の義務であり、その義務を全うすることを男性の「名誉」（ナムース）とみなしてきた。服装規定は、そうした伝統的な考え方を、法律という形で女性たちに強制したものだとの見方もある。服装規定に反発する女性たちは、服装



写真1 イラン女性の模範的服装を示したポスター。ホテルの入り口などで見かける。右がチャードル、左がマグナエとよばれる被りもの。

規定が、女性たちの選択によるものではなく、政権を担う男性が女性に強要したという点を問題としている。現状に納得のいかない女性は、スカーフを浅く被る、体の線がみえるようなタイトなコートを着る、メイキャップをするなど、様々な形で抵抗してはいるが、服装規定を変えることはできないのが現状だ。また、服装規定に否定的な人の多くは、チャードルを着ている女性はそうでない人よりも体制寄りだといったように、体制側にいる男性たちが、女性の服装を現体制への忠誠心を測る尺度として利用していることにも反発しており、スカーフやコートを着用するか否かは、個人の宗教的信条の問題であり、国家が介入する事項ではないと考えている。

一方で、服装規定を肯定する人も少なくない。スカーフやコート、さらにその上からまとうチャードルは、ムスリム女性の誇りであり、女性を商品化する西洋的な女性観への抵抗の証だというのがその理由だ。痴漢避けとしての効果も認められている。服装や髪形を気にせず済むという実用的な理由による支持者も結構いる。

このように服装規定をめぐる賛否両論あるのだが、服装規定が導入されてから三〇年間の社会の変化をみると、全体として服装規定が女性の社会参加に肯定的な役割を果たしてきたことがわかる。最も重要なことは、スカーフが忌避されていたパフラヴィー王朝時代（一九二五―一九七九年）には、男性

に視られる、イスラームの教えに反するという理由で外出させてもらえなかった女性たちが、学校に通えるようになり、あるいは家の外で働けるようになったことである。つまり、服装規定は、帳の後ろに隔離されていた女性たちを公共の場に導いたのである。

### 三三 公的空間の男女分離

スカーフや長衣が携帯式のカーテンだとすれば、帳は、固定式のカーテンである。前者は公的空間に出ていく際に女性が纏うことで、女性と他の男性たちとを分離するものだが、後者は、性別に基づいて公的空間を分離するものである。

この帳にも、単なる仕切りから完全分離にいたるまで、様々な形がある。たとえば、大勢の人が乗り降りする公共交通機関。市内バスは、前方が男性、後方が女性（写真2）、地下鉄は女性車両を設けているが、女性が男性車両に乗ることを禁じているわけではない。長距離バスは、男女の配置を車掌が差配するが、飛行機の場合は、基本的にはそうした配慮はない。

男女の空間分けは、海水浴場、プール、運動施設、美容院、図書館の閲覧室、モスク、イマームガーデと呼ばれる聖者廟、宗教集会などでも行われているが、もつとも厳格な



写真2 テヘランの市内バス。後部が女性席。



写真3 テヘラン市内の私立学校。

のが学校であろう。これにも微妙なルールがある。男子の場合は、小学校時代は、女性教師に教わることも多く、学校が男性のみの空間となるのは中学校からである。これに対して女子の場合は、小学校から女性だけの空間で育つ。この相違は、男子一五歳、女子九歳というイラン民法に定められた成年年齢に関係している<sup>9)</sup>。しかし、例外もある。難関国立大学に多くの学生を合格させているような私立の女子高校では、入試に備えるために高校最後の一年間は、男性の著名講師を招くところもあるからだ。しかしながら、こうした講師は授業のみを担当し、それ以外の学校運営にはかかわらない。男性講師が居ない時間帯は、生徒は、スカーフやコートなしで活動することができる。校庭に高い壁を巡らせ、校庭でも軽装で過ごせるよう配慮しているところもある。

女子校という女性だけの空間の誕生は、イラン女性の在り方を大きく変えた。共学だからという理由で学校に通えなかった女子や男性と同じ職場だからという理由で働くことが許されなかった女性たちを救ったのである。女子校の管理運営を通じて女性たちは、その能力を大いに伸ばし、女子高校生たちの大学進学意欲を掻き立ててきた。その結果、二〇〇三年には、国立大学の全在学者（短大から博士課程まで）に占める男女比が逆転し、女子学生が過半数を超えてしまった<sup>10)</sup>。

このように男女分離は、家庭の中に閉じ込められていた女性を、社会に送り出すための装置となった。その点では、スカーフやコートも、男女分離も、ともにイスラーム的な規範を侵すことなく女性の社会参加に肯定的な役割を果たしたことになる。しかしながら、実際には、携帯式のカーテンである前者と固定式のカーテンである後者は、正反対の機能を持つ



ている。スカーフやコートは、女性がイスラームの教えに抵触せず、公的空間で男性とともに活動することを可能とする装置であるのに対して、男女分離は、公的空間を男女別にする<sup>10</sup>ことで、男女がともに活動する機会をできるかぎり減らそうとする装置だからだ。

革命後、イランでは、スカーフとコート、男女分離の微妙な組み合わせが、女性の社会参加を促進させてきたのだが、両者はもともと相反する方向性を持っていることから、時間の経過とともに、その矛盾が明るみになってきた。次にその問題を、大学と神学校を事例に考察してみたい。

#### 四．大学…男女共同の空間

小学校から高校まで男女別学で過ごしてきたイランの若者にとって、大学は魅力的な世界に映る。それは、イランの大学のほとんどが共学だからだ。キャンパスの入口では厳格な服装チェックが行われ、キャンパス内でも男女の接触を牽制するために監視の目が光る。しかし、原則的には、服装規定を守りさえすれば、男性も女性も同じキャンパスライフを過ごすことができる。

しかし、大学が共学のまま存続してきたのは、大学を男女別にするのが困難だったからであり、共学が理想だと考えられてきたわけではない。革命直後は、イスラームの原則を徹底させるために教室をカーテンで二分するなどの方法で、男女の空間分けが試みられた。その後、教室内における物理的な空間分けは徐々になくなっていくが、大教室の場合は女性が男性の後ろに座るなど緩やかな空間分離が行われている。しかし、最近になってこの共学の存在に警鐘を鳴らす人が次々に現れた。宗教界からもたびたび適齢期の男女が同じ教室で学ぶことに対する批判の声があがっていたのだが、ついにカムラン・ダーネシジュエ科学技術大臣が、二〇一一年度秋学期から大学の男女空間分けを実施すると公言した<sup>11</sup>。

もちろん、女性たちの多くは、この政策に反対している。それは、共学が男女別学よりも平等だからではない。共学の大学には、見えない壁がある。女性教員は増えているものの、教授や管理職などの地位にあるのはほとんどが男性である<sup>12</sup>。学生は、学部では女性比率が男性を超える学科も少なくないが、修士、博士と上がるにつれて男性比率が高くなる。女子学生は、男性教授に質問しにくい、男性教授は女子学生を男子学生と同等に扱わない

ど数々の問題が指摘されてきた。それでも、共学の大学で学び、働く女性たちの多くは、社会の主要な機能を男性が担っている状況のなかで男女分離が推進されれば、女性は、社会の流れを変えるような主要な動きからは、疎外され、女性だけの環境に閉じ込められてしまうと考えている。

#### 五．神学校…女性の女性による女性のための空間

女性の能力を伸ばすためには女性だけの空間を作ることが望ましいとの考えを支持しているのが、女子神学校で教え、学ぶ女性たちである。もともと神学校は男性だけの世界だったが、一九七九年の革命後、革命の指導者ホメイニー師が、女性の宗教指導者養成のための女子神学校ジャーム・アルザフラーの設立を命じたことがきっかけとなり、一九九〇年代以降、多くの女子神学校が設立された<sup>13</sup>。現在、全国に約三二〇の女子神学校がある<sup>14</sup>。厳格な男女分離方針を採用しているが、女性教員が確保できない場合などは、男性教師が教壇に立つこともある。ただし、その場合は、女性はチャードルを着用し、顔もできる限り隠すという徹底ぶり<sup>15</sup>で、片目のみで対応するという女性もいる。一方、男性教師もまた女性を視ないために、教卓の前に衝立を置き、その後ろから講義をするという方式を採用するところもある。(写真4) しかし、

最近では、神学校でトレーニングを受けた女性教師が増え、女性が担当できる授業のレベルも上昇しているために、教育、研究、運営の多くを女性だけで担



写真4 コム、ザフラー女子神学校の教室



写真5 イスラーム的服装の遵守を促すポスター

えるようになってきた。神学校の学生たちの間では、女性だけの環境に対する満足度が非常に高い。「安心できる」、「家族の理解を得やすい」、「服装を気にしなくていい」、「遠慮なく意見が言える」などが、その主な理由だ<sup>15</sup>。授業中はスカーフをしているが、グループ学習の時間になると服装もかなり自由になり、リラクセスしたムードが漂う。学生から管理職まで、ほぼ女性たちだけで担っている女子神学校は、一見、女性天国のようでもある。しかし、実際に女子神学校のカリキュラムや在り方それぞれ自体を管理しているのは、男性の宗教指導者である。男性宗教指導者が、女子神学校の設立を推進してきたのは、宗教教育者や宣教師を育成するためで、女性が男性と同様にムジュタヒド（イスラーム法学者）となって信者を導くことを想定したものではなかった。

しかし、最近、セファティー女史やゴルギーリー女史のようなイスラーム法学に関する高い知識をもった女性が、女性のためのダルセ・ハーレジ（ムジュタヒドになるための学習課程）を開講するなど、女性の能力向上に意欲的に取り組み始めた<sup>16</sup>。しかし、現存する高位の男性ムジュタヒドの大半が、法解釈（イジュティハド）に必要な知識を修得した女性は、自身のために法解釈を行うことはできるが、信者が女性ムジュタヒドの法解釈に従う

ことはできないといった見解を維持しているために<sup>17</sup>、長い年月をかけて法解釈を学ぶことに意義を見いだせない女性も少なくないなど、多くの課題を残している。

## 六、ヴェイル、長衣、帳とばりの可能性と限界

革命後のイランでは、政権による服装規定や男女分離政策が、女性たちの活動範囲を広げてきた。しかし、社会参加という面では、なお多くの課題が残されているだけでなく、どのような社会参加が女性にとって望ましいかという点でも意見は分かれている。

大学はもちろんのこと役所など男女共同の職場で働く女性の多くは、イスラーム的な服装を遵守すれば男女共同の職場で働くことは何ら問題はないと主張する。またそうした女性たちは、男女の空間分離は、女性の従属的な立ち位置を固定化してしまうとみなし、あくまでも男女共同の職場のなかでの地位向上を求めている。しかし、そこには二つの壁がある。一つは、意思決定権を持つポストへのハードルが極めて高いことである。もうひとつの壁は、女性の分断化である。服装も含め体制に迎合的な女性は、そうでない女性に比べ圧倒的に有利であり、管理職はこうした女性にしか与えられない。その理由は、彼女たちは、イスラームにおける女性観を肯定しており、既存の構造、つまり男性中心の社会を脅かさないとみられているからである。

では神学校のような女性だけの空間はどうか。神学校で学ぶ女性は、完全な男女の空間分離が女性にとって望ましい環境を留意すると考える。レイの女子神学校の校長は、自身の体験を次のように語った。

「私の父は、聖職者で、ヴェールもろくに被らない革命前の学校が嫌いで、私と妹は中学を終えると家にいるように言われた。しかし、革命が起き、ザフラー女子神学校ができたお蔭で、父は私が学ぶことを許してくれた。私はそこで宗教の勉強をしただけでなく、高校の課程も終えることができた。卒業後は、ザフラー女子神学校の教師として働いた。そうして今は、ここで校長をしているのよ。」<sup>18</sup>

彼女は、男女別学こそ、革命が女性に与えた最も大切な恩恵とみる。また、イスラームでは女性を非常に大切な存在と見なしているので、男性には女性

を守る義務があると言いつ切る。女性の美徳を犠牲にしなければならないような仕事を女性がしなくてはならないという。だから、男性のする仕事と女性のする仕事は同じである必要はなく、女性が男性並みに働くことをもって平等と考えるのは間違いだと言張する。

セファテイー女史も同様の見解を持つ。彼女は、「イスラーム共和国政府は職場における男女分離を真剣に実施すべきだ」と考える。「女性が担う必要のない仕事から女性を解放し、彼女たちを必要としている仕事へと導く必要」があるという。

以上に見てきたように、イランの女性たちは、「ヴェイル」「長衣」という携帯式カーテンを利用することで、公的空間における女性の進出を推進すべきだという人々と、男女を分かち「帳」あるいは、固定式カーテンの設置範囲を広めることで、女性だけの公的空間を拡大すべきだという人々に分かれている。しかし、どちらの考えを支持しようとも女性たちはみな、いずれの路線が女性によりふさわしいのかを決めているのは、男性指導者たちだという皮肉な現実には直面している。

## 【註】

- (1) 本稿で紹介したコーランの章句は、日本ムスリム協会発行『日耶対訳・注解 聖クルアーン(第六刷)』からの引用。ネットでも閲覧できる。△[http://www.2dokido-kine.jp/racket/koran\\_frame.html](http://www.2dokido-kine.jp/racket/koran_frame.html)
- (2) 井筒訳は、「男の信者たちに言っておやり、慎み深く目を下げて(女をじろじろ眺めない)、陰部は大事に守って置くよう(不倫な関係に使わぬよう)、と。」井筒俊彦訳『コーラン』(中)岩波文庫 一九八六年 一九四頁。藤本訳は、「男子の信者に、目を伏せて隠し所をまもるよう」に言え。」藤本勝次 責任編集『コーラン』中央公論社 一九七九年 三三三頁。
- (3) 井筒訳では、「それから女の信者にも言っておやり、慎みぶかく目を下げて、陰部は大事に守っておき」一九四頁。藤本訳では、「目を伏せて隠し所を守り、……」三三三頁。
- (4) 井筒訳では、「覆い」一九四頁。藤本訳では、「顔おおい」三三三頁。
- (5) 井筒訳では、「必ず長衣で(頭から足まで)すっぽり体を包みこんで行くよう申しつけよ。」二九七頁。藤本訳では、「外衣で体を隠せ」三九二頁。
- (6) 井筒訳では、「垂幕」二九六頁。藤本訳では、「カーテン」三九二頁。

(7) Haleh Ashfar, *Islam and Feminisms: an Iranian Case-Study*, Maemilian Press, 1998, p. 202.

(8) アラビア語でヴェール、カーテン、仕切り、区切りなどの意。女性が身体的特徴を隠すために着用するスカーフや長衣だけでなく、男女の空間を分離するための仕切りやカーテンの意味もある。しかし、現在、欧米や日本では、ムスリム女性のかぶりものの意味に使われることが多い。

(9) イラン民法の英訳サイト。二二〇条一項。二二〇の年齢はいずれも太陰曆に基づくもの。△<http://www.alaviansassociates.com/documents/civilcode.pdf>

(10) 桜井啓子「上昇する期待と厳しい現実—イラン社会を支える若者の実像」『中東研究』第五〇五号 二〇〇九・二〇一〇年、六一頁。

(11) Khabaronline, 7 January 2010. <<http://www.khabaronline.ir/print-35199.aspx>> (二〇一〇年四月二三日閲覧)

(12) 桜井啓子 前掲論文 八九頁。

(13) Keiko Sakurai, "Women's empowerment and Iran-style seminars in Iran and Pakistan", Keiko Sakurai and Fariba Adakhs, *The Moral Economy of the Madrasa: Islam and Education Today*, Routledge, 2011, pp. 34-35.

(14) 現在、女子神学校は、ホラーサーン州に四〇校、それ以外の地域に二八〇校あり。Farsnews (29/01/1389), <<http://www.farsnews.com/printable.php?m=890129062>> (Accessed 10 July 2011)

ホラーサーン州の神学校ホームページ <<http://www.hozekhorasan.com/Default.aspx?entryID=242>> (二〇一一年六月一日閲覧)

(15) テヘラン郊外のレイのアブドゥル・アズィーム女子神学校での筆者によるインタビュー。(二〇一一年五月一五日実施)

(16) Tebyan (13/12/1385) <<http://www.tebyan.net/index.aspx?pid=33513>> (Accessed 1 June 2011)

(17) ホメイニー師は、「一般信者は、男性、成人、良識人、二ニイマーム派、嫡出子、かつ生存しており、公正であるムジュタヒドに追従しなければならない」との見解を自身の『諸問題の解説』で明らかにしている。△<http://www.seminaryh.net/Pdf/KResale/resale01.htm>> (二〇一一年一月三日閲覧)

(18) アブドゥル・アズィーム女子神学校でのインタビュー。

(19) ソフレ・セファテイー女史の事務所での筆者によるインタビュー。(二〇一一年六月六日実施)

※写真1〜5は筆者が撮影。